

# 福岡県北九州市若松区頓田方言の副助詞

岡野 信子

## I. はじめに

1. 調査対象地： 北九州市若松区は北九州市の西北端に位置する。頓田（ト<sup>ニ</sup>ダ）はこの若松区西部の農業地区で、若松区を中心街からはバスで約30分の距離である。総面積は約400ヘクタール、人口は平成9年9月末現在、男性354人、女性371人、計725人、総世帯数は262世帯で、その多くは農家である。田畑の面積は約50ヘクタールで、米作を主とする農家と白菜・キャベツなどの蔬菜作りを主とする農家がある。この頓田には北九州市上水道・工業用水の水源として重要な役割を果たしている頓田貯水池があり、それを中心として総面積240ヘクタールの響灘緑地自然公園がある。
2. 調査年月日：1998年3月16日 午後1時～3時50分
3. 話者： 有田綾子 大正15年10月25日生（71歳）  
柴田雅江 大正9年10月26日生（77歳）  
白橋清子 大正13年9月2日生（73歳）
4. 調査者・調査場所： 岡野信子、頓田初日（シ<sup>ニ</sup>ニチ）公民館
5. 調査方法： 統一調査票による質問調査
6. その他： ①アクセントは棒引きで記す。  
②話者の説明は（ ）内に、調査者の説明は〈 〉内に記す。  
③たとえば「A. 添加《さえ・も》《マデ・モ》などの、《平仮名》は調査票に示された共通語副助詞、《片仮名》は本調査で得られた頓田方言の副助詞である。

## II. 調査結果

（1）添加・例示・提題などをあらかずもの

### A. 添加《さえ・も》《マデ・モ》

1. 雨だけでなく風さえ吹いてきた。 ○ア<sup>ニ</sup>メダケナラ イーケド カゼマデ<sup>ニ</sup> フイチキタ バイ。（「カゼサエ」とは言わない）
2. 今年は豊作で、米ばかりか麦もよくとれた。 ○コトシャ<sup>ニ</sup> ホーサクデ コノバツカリヤア<sup>ニ</sup>テ ムギモ ヨー<sup>ニ</sup> デケタ バイ。

### B. 予想外の事実《さえ・だけ》《サエカ・サエ・ダケ》

3. 小学生でさえ簡単にワープロを使っている。 ○シヨ<sup>ニ</sup>ーガクセーデサエカ カンタ<sup>ニ</sup>ンニ ワープロ ツカイヨル。（「～サエ」も言う）
4. （宝くじが）当たると思っていなかっただけに嬉しい。 ○タカ<sup>ニ</sup>ラクジガ アタロ<sup>ニ</sup>ター オモ<sup>ニ</sup>ーチョランヤッタダケ<sup>ニ</sup> ヨケー<sup>ニ</sup> ウレシカッタ バイ。

C. 条件《サエ》(《サエ》)

5. 暇さえあれば釣りに行っている。○ヒマサエ アリヤー サカナツリノジョー  
イッチカラ。〈「サカナツリノジョー」は「魚釣りにばかり」である〉

D. 例示《でも・ほど・まで・など・やら・なり・なんて》(《ナト・ドモ・ドマ・ホド・  
マデ・タリ～タリ・ヤラ～ヤラ・ナト・グレー・ナンチ・ノナンノ》)

6. まあお茶でも飲んでください。①マー オチャナト フージツカサイ。／②マー  
オチャドモ フンジ イカン ネー。〈「～ナト」は「何もないがせめてお茶なり  
と」と、謙遜の気持ちをこめている。「～ドモ」は単純な例示〉

7. みやげにはこのまんじゅうなどどうかな。○オミヤゲニヤー コブ マンジュー  
ドマー ドデーヤロー カチー。〈「ドマー」は「どもは」である〉

8. 思わず跳び上がるほど嬉しかった。①トピアガルホド ウレシカッタ バイ。  
〈「思わず」は言わない〉／②テント チト ヒックリカヤシタゴト ウレシカッタ。

9. まさかあなたにまで話が行くとは思わなかった。○マサカ アンタニマデ ハチ  
シガ イクター オモワンヤッタ。〈以前は「オモワザッタ」と言っていた〉

10. ながるやら蹴るやらの乱暴をはたらいた。○クデータリ ケツタリ オーアバレ  
シタ バイ。

～やら ①ナンヤラ カンヤラ モッチキタ。〈何やかや持ってきた〉／②イク  
ヤラ イカンヤラ ワキヤーワカラン バイ。〈行くのか行かないのかさっぱりわ  
からないよ〉

11. 私になり相談してくれれば良かったのに。○ウチニナト ユーチクレテナラ ヨ  
カッタソニ。〈「～ナト」は「なりと」。「～テナラ」は簡素な敬語〉

12. 野菜なんていくらでもできる。①ヤサイグレー ナンボデモ アラー ナ。／②  
タバナンチ ハキヤー セン バイ。／③ダビノナンノ メッタニ ハク モンカ  
イ。

一対の語の例示《だって》(《クテ・デモ・テラ》)

13. しょうゆだってみそだって作っていたんだ。①ショウユタテ ミソタテ ムカジャ  
イエデ ツツリヨッタ。／②ショウユデモ ミソデモ イエデ ツツリヨッタ バ  
イ。／③ハラガ セクテラ アタマガ イデーテラ コマゴトノ オイー コ下  
ガ。〈腹が痛むとか頭が痛いとか、なんとも文句が多い〉

択一《なり》(《ナット・ナト》)

14. 私なり弟なりがお手伝いに行きます。○ワタシナット オト～トナット カセー  
ニ イキマス。

14'. 菓子なり餅なり好きなのをお上がり。○カシナト モチナト スキナソー オ  
アカリ。〈「スキナソ」の「ソ」は準体助詞〉

例外でない《とて》(《チュータチ》)

15. 村長とて、そうするより仕方なかったんだろう。○ソ<sup>ン</sup>チョ<sup>ー</sup>チュ<sup>ー</sup>タチ ソ<sup>ダ</sup>  
ー スルヨリ ショ<sup>ー</sup>ガチカッチョ<sup>ロー</sup>。

列挙《も》《モ》

16. 春らしくなって、梅も桜も一度に咲いた。○ハ<sup>ル</sup>ラ<sup>シ</sup>ユ<sup>ー</sup> ナッ<sup>テ</sup> ウ<sup>メ</sup>モ<sup>サ</sup>  
クラ<sup>モ</sup> イッ<sup>シ</sup>ョ<sup>ー</sup> ヨ<sup>ノ</sup>。

同類の暗示《も》《モ》

17. テレビもそろそろ買い替えよう。○テ<sup>レ</sup>ビ<sup>モ</sup> ホ<sup>ツ</sup>ボ<sup>ツ</sup> カ<sup>イ</sup>カ<sup>ヨ</sup>ー。

やわらげ《でも》《ドモ・ナト》

18. まあお茶でも飲んでいきませんか。○マ<sup>ー</sup> オ<sup>チ</sup>ャ<sup>ド</sup>モ<sup>ア</sup>ン<sup>デ</sup> イ<sup>カ</sup>シ<sup>カ</sup>チ<sup>。</sup>

18'. 何もなければお茶なりと飲んでください。○ナ<sup>ン</sup>ニ<sup>モ</sup> ネ<sup>ー</sup>ケ<sup>ン</sup>ド<sup>マ</sup>  
オ<sup>チ</sup>ャ<sup>ナ</sup>ト<sup>ア</sup>ン<sup>デ</sup> ツ<sup>カ</sup>ザ<sup>イ</sup>。〈「～ナト」の場合、謙遜の心持ちがある〉

E. 包括《など》《ドモ?・ナンカ》

19. 盆には子や孫などが帰ってくる。○ホ<sup>ン</sup>ニ<sup>ャ</sup> コ<sup>ド</sup>モ<sup>ヤ</sup>ラ<sup>マ</sup>ゴ<sup>ド</sup>モ<sup>ガ</sup> モ<sup>ド</sup>ッ<sup>チ</sup>  
ヅ<sup>ル</sup>ケ。〈「ドモ」は複数をあらわす接尾辞かもしれない。「コ<sup>ド</sup>モ<sup>ヤ</sup>ラ<sup>マ</sup>  
ゴ<sup>ダ</sup>ラ<sup>ガ</sup> ソ<sup>ー</sup>ヨ<sup>カ</sup>エ<sup>ッ</sup>チ<sup>ク</sup>ル」とも〉〈「ソ<sup>ー</sup>ヨ」は「全部」である〉/提  
示された文を直訳すれば「コ<sup>ド</sup>モ<sup>ヤ</sup>ラ<sup>マ</sup>ゴ<sup>ナ</sup>ン<sup>カ</sup>」であるが、こうは言わない。

F. 提題《だって》《チュータチ・タチ》

20. ゲートボールだってできるよ。①ゲ<sup>ー</sup>ト<sup>ボ</sup>ール<sup>チ</sup>ュー<sup>タ</sup>チ シ<sup>ギ</sup>ラ<sup>ナ</sup>。/②ゲ<sup>ー</sup>  
ト<sup>ボ</sup>ール<sup>タ</sup>チ シ<sup>ギ</sup>ラ<sup>ナ</sup>。セ<sup>ン</sup>ダ<sup>ケ</sup> ヨ。

話題にあげる《って》《チャ》

21. 何だい、いいことって。○チ<sup>ン</sup> カ<sup>ナ</sup>。エ<sup>ー</sup> コ<sup>ド</sup>チ<sup>ャ</sup>。

21'. 今から行くななんて大変だねえ。○イ<sup>マ</sup>ガ<sup>ラ</sup> イ<sup>コ</sup>ー<sup>チ</sup>ャ シ<sup>ロ</sup>ジ<sup>ー</sup> チ<sup>ー</sup>。

極端なものの提示《でも・くらい・すら・も》《デモ・タテ・グライ・スラ・モ》

22. そんなこと子供にでもできるよ。①ソ<sup>ダ</sup>チ<sup>コ</sup>ド<sup>グ</sup>ライ<sup>ア</sup>カ<sup>ゴ</sup>デ<sup>モ</sup> デ<sup>ダ</sup>ラ<sup>ナ</sup>。  
/②ソ<sup>ダ</sup>チ<sup>コ</sup>ド<sup>グ</sup>ライ<sup>ア</sup>カ<sup>ゴ</sup>タ<sup>デ</sup> シ<sup>ギ</sup>ル<sup>バイ</sup>。

23. 食べることくらいは何とかしたい。○タ<sup>ブ</sup>ル<sup>グ</sup>ライ<sup>ド</sup>ダ<sup>ー</sup>カ ショ<sup>ー</sup> ワ<sup>ナ</sup>。

24. 名前すらろくに覚えていない。○ジ<sup>ブ</sup>ン<sup>ノ</sup> ナ<sup>マ</sup>エ<sup>ス</sup>ラ<sup>ワ</sup>カ<sup>リ</sup>ャ<sup>ー</sup> セ<sup>ン</sup>。

25. 弁当代に千円もかかった。○ベ<sup>ン</sup>ト<sup>ー</sup>ダイ<sup>ニ</sup> セ<sup>ン</sup>エン<sup>モ</sup> カ<sup>カ</sup>ツ<sup>タ</sup> バ<sup>イ</sup>。

軽いものをあげる《さえ》《サエ・サエカ》

26. これさえあればもう大丈夫だ。○コ<sup>レ</sup>サ<sup>エ</sup> ア<sup>リ</sup>ャ<sup>ー</sup> セ<sup>ワ</sup>ネ<sup>ー</sup>。

26'. 何も関係ない。○ナ<sup>ー</sup>ン<sup>サ</sup>エ<sup>カ</sup> ウ<sup>チ</sup>ド<sup>モ</sup> カ<sup>ン</sup>ケ<sup>ー</sup> チ<sup>イ</sup>。〈「コレサエカ」  
も言うだろう〉

(2) 分量・程度・基準などをあらわすもの

G. 分量・程度《ほど・くらい・ばかり》《ホド・グライ・バカシ・ナト》

27. 旅行で三日ほど居なかったよ。 ○リョ<sup>コ</sup>ー<sup>デ</sup> ミッ<sup>カ</sup>ホド オランヤ<sup>ッ</sup>チョ<sup>ラ</sup>ナ。
28. 茶碗に半分くらいください。 ①チャ<sup>ワ</sup>ンニ ハン<sup>ブン</sup>グ<sup>ライ</sup> ツ<sup>カ</sup>サイ。 / ②チ<sup>キ</sup>ット ツイ<sup>ジ</sup> ツ<sup>カ</sup>ッセー (「少し入れてください」と言うことが多い)
29. 子供にでもわかるくらいのやさしい本だ。 ①コ<sup>下</sup>モ<sup>デ</sup>モ ワ<sup>カ</sup>ル<sup>グ</sup>ライ<sup>ノ</sup> ホ<sup>ン</sup>ヤ<sup>チ</sup>ー / ②コ<sup>下</sup>モ<sup>デ</sup>モ ワ<sup>カ</sup>ル<sup>ゲ</sup>ナ ホ<sup>ン</sup>ヤ<sup>チ</sup>ー (「ワカルゲナ」は「わかるような」である)
30. 一週間ばかり留守にするので頼むよ。 ①イ<sup>ッ</sup>シュ<sup>ー</sup>カン<sup>グ</sup>ライ ルススル<sup>ケ</sup>ータ<sup>ム</sup> バイ。 / ②イ<sup>ッ</sup>シュ<sup>ー</sup>カン<sup>バ</sup>カシ ルススル<sup>ケ</sup>ータ<sup>ム</sup> バイ。
- 30'. まあ一週間なりと行ってこよう。 ○イ<sup>ッ</sup>シュ<sup>ー</sup>カン<sup>ナ</sup>ト イ<sup>ッ</sup>チ<sup>ー</sup>コ<sup>ー</sup>。

H. 基準《ほど》《ホド》

31. 今年の寒さは去年ほどではない。去年は寒かった。 ○コ<sup>下</sup>シャ<sup>ー</sup> キョ<sup>ネ</sup>ンホ<sup>ダ</sup>ーサ<sup>ム</sup>ネ<sup>ー</sup> チ<sup>ー</sup>。 キョ<sup>ネ</sup>ン<sup>ナ</sup> サ<sup>ム</sup>カ<sup>ッ</sup>タ<sup>ケ</sup> ナ<sup>ー</sup>。

I. 理由《ばかり》《バックリ》

32. ちょっと油断したばかりにとんでもないことになった。 ○チ<sup>ョ</sup>ット ユ<sup>ダ</sup>ン<sup>シ</sup>タ<sup>バ</sup>ッカ<sup>リ</sup>ニ ヒョ<sup>ー</sup>シ<sup>モ</sup>ネ<sup>ー</sup> コ<sup>ト</sup>ガ <sup>デ</sup>ケ<sup>タ</sup>。

J. 「それにふさわしく」《だけ》《ダケ》

33. 苦労なされただけあってものごとがよくわかっておられる。 ○ア<sup>ロ</sup>ーシ<sup>チ</sup>ャ<sup>ッ</sup>タ<sup>ダ</sup>ケ コ<sup>下</sup>ガ ヨ<sup>ー</sup> ワ<sup>カ</sup>ッ<sup>チ</sup>ョ<sup>ッ</sup>チ<sup>ー</sup> ネ<sup>ー</sup>。

形式名詞的用法《なんか》《ヤラナンヤラ・ヤラナンカ》

34. 毎日孫の守りやなんかで忙しい。 ○マ<sup>イ</sup>ニ<sup>チ</sup> マ<sup>ゴ</sup>ノ モ<sup>リ</sup>ヤ<sup>ラ</sup>チ<sup>ン</sup>ヤ<sup>ラ</sup>デ ヤ<sup>ゼ</sup>ネ<sup>ー</sup>。(「モリヤラチンカ」とも言う)

「それこそ」《こそ》《コソ》

35. それこそバケツをひっくりかえしたような大雨だ。 ○ソ<sup>レ</sup>コ<sup>ソ</sup> バ<sup>ケ</sup>ツ ウ<sup>ッ</sup>チ<sup>ー</sup>タ<sup>ゲ</sup>ナ オ<sup>ー</sup>ア<sup>メ</sup> バイ。(「ウッチータゲナ」は「移したような」で、「どしゃぶりの形容である」)

「ばかりか」《ばかり》《ダケジャノ<sup>ー</sup>テ》

36. 父ばかりか母もスポーツ好きだ。 ○チ<sup>チ</sup>ダ<sup>ケ</sup>ジャ<sup>ノ</sup>ア<sup>ー</sup>テ ハ<sup>ハ</sup>モ ス<sup>ポ</sup>ー<sup>ツ</sup>ズ<sup>キ</sup>バイ。

K. 今にも行われる《ばかり》《バックリ》

37. もう食べるばかりにしてある。 ○ハ<sup>シ</sup>ョ<sup>ー</sup> 下<sup>ル</sup>バ<sup>ッ</sup>カ<sup>リ</sup>ニ シ<sup>チ</sup>ャ<sup>ッ</sup>タ。  
 <「シチャッタ」は「してあった」>

動作の完了直後《ばかり》《バックリ・トコ》

38. 今、仕事から帰ったばかりだ。 ①イ<sup>マ</sup> シ<sup>ゴ</sup>ト<sup>カ</sup>ラ モ<sup>ド</sup>ツ<sup>タ</sup>バ<sup>ッ</sup>カ<sup>リ</sup> バイ。  
 / ②イ<sup>マ</sup> シ<sup>ゴ</sup>ト<sup>カ</sup>ラ モ<sup>ド</sup>ツ<sup>タ</sup>ト<sup>コ</sup> タイ。(「トコ」(所)はちょうどその時

期であることを言う)

基準《まで》《マデ》

39. 駅までもうちょっとだ。○エキマデ モー チョコット バイ。

L. 等量の反復《ずつ》《スタ》

40. 一人ずつ呼んで話をした。○ヒトリスタ ヨージ ハナショー シタ。

M. 等量の配分《ずつ》《スタ・ツラ》

41. 一人に二個ずつみかんをやる。○ヒ下リニ フタツラ ミカンノ ヤル。(「フタツスタ」とも言う。「ヒ下ツツラ」「フタツラ」は言うが三つ以上には「ツラ」は言わず「スタ」を言う)

(3) 限定・限界などをあらわすもの

N. 限定《しか・だけ・ばかり・きり》《シカ・ハッチャ・ダケ・ジョー・ギリ・ダケ》

42. 酒はたまにしか飲まない。○サキヤー タマニシカ ノマン。〈「タマニハッチャノマン」も聞いたことがある〉

43. 今朝は寝坊をしてお茶だけ飲んできた。○テサー ネワズレテ オチャダケ ノージ キタ。

44. そんなに勉強ばかりしていると体に毒だよ。○ソダー ベンキョーノジョー ジョルト カラタニ下ダ バイ。〈「ジョー」は常に「ノジョー」「ンジョー」のように格助詞「ノ(ン)」に続く〉

44'. 家にばかり居ないで少しは外に出なさい。○ウチノジョー オランダ チーター ソ下ー デチイ。

45. うちの田が残っているきりで、よそは全部終わった。○ウチノダガ ノコッチョルギリデ ヨソワ ソーヨ シマエタ。(ウチノダケ ノコッドー。)

O. 強調《しか・こそ》《シカ・ハッチャ・コソ》

16. もうこれだけしかないよ。①モー コンダケシカ ネー バイ。/②コレハッチャネー バナ〈「ハッチャ」はもっと高齢の人のことば、今はあまり使わないと話者たちは言う。筆者は昭和30年10年代にはしばしば聞いている〉

17. 今年こそいい年にしたい。○コトシコソ イー トシ モラワンニャー。

P. 限界《だけ・まで》《ダケ・マデ》

18. これだけ言っても分からないのか! ○コンダケ ユーデモ ワカラン ソカー。

19. 2千円くらいまでなら何とかなる。○ニセンエンダライマデナラ ナントカ ナロー ワナ。

(4) 陳述的なもの

Q. 「～ば～だけ」《だけ》《ダケ》

50. 肥料をやればやるだけよく育つ。○コヤシオ ヤリヤー ヤッタダケ ヨー フトル。(「ヤッタダケ」は「ヤルダケ」とも言う)

「假定形・ば・こそ」《こそ》《コソ》

51. 心配すればこそ言うんだよ。①アンタノ コト オモヤーコソ ユーン バイ。  
／②シンバイスリヤーコソ ユーン バイ。

52. 彼は文句こそ言え、人の言うことなど聞かない。○アリヤー モンクコソ ユーケンド ヒトノ ユー コター キキヤー セン。〈「～コソ イエ」で中止する言い方はこの調査では出なかったが、「○アリヤー モンクコソ イエ ヒトノ ユー コトナカ キキヤー セン」はよく聞くように思う。「ハタラキコソ スレ アソブ ミチャー シラン」などとも〉

53. 「～でこそあれ」○チンデコソ アレ、スル コタ モナ コテ。(何はさておいてもすることはしなくては)

「未然形・ば・こそ」《こそ》・《假定形・ば・こそ》

54. 押しても引いても動かばこそ。○オシタチ ヒータチ ウゴキヤーコソ。ドージレチカラ。(「押しても引いてもびくとも動かない。ふれくされて」は、人間の場合にも木の場合にも言う)〈「ウゴキヤーコソ」も「ウゴカバコソ」も言うと言えしたが「未然形・ば・こそ」は聞かないように思う〉

54'. 言ったって聞きはしない、強情を張り通して。○ユータチ ユータチ キキヤー コソ。ジョーシキノジョー シデカラ。

「こそ」《こそ》

55. 失礼なことを言わないでこそ

「こそ。」《こそ》「こそ」で終わる形は54、54' にしか見えないが、「～コソ～」は以下のように多く聞かれた。

55'. 失礼なことを言わないでこそよかった。○シツレーナ コトー イワンデコソ ヨカッタ。

55". あの人がすればこそ今日のお客がさばけた。○アレガ スリヤーコソ キョーノ オキヤクガ サバケタ。

55"". おれがおればこそこの家が成り立っていく。○オレガ オラコソ コノ イエガ ナリタッチ イク。

55"". 働けばこそもうかる。○ハタラキヤーコソ モーガル。

「～こそ～けれど」《こそ》《コソ》

56. 今でこそ家から出ないが、昔はよく出歩いていた。○イマデコソ ウロタエンケンド ムカシャ ヨー ウロタエテマワリヨッタ。〈「ウロタエル」は「出歩く」の意である〉

「～ば～ほど」《ほど》《ホド》

57. 働けば働くほどもうかる。 ○ハタラキヤー ハタラクホド モーガル。

R. 打ち消しとの呼応《まで》《マデ》

58. 村長に聞くまでもないだろう? ○ソダナ コダー ソンチョーニ キクマデモ  
ナカロー。

否定との呼応《も》《モ》

59. 朝から忙しくて昼飯も食えない。 ○アサカラ セワシューテ ヒルメシモ クイ  
ダサン。〈「クイダサン」は「食べることが実現しない」の意味である〉

否定的取り上げ《など》《ナンカ・グライ》

60. こんなものなどいくらでもあるよ。 ①コダナ モンナンカ ナンボデモ アラー  
ナ。/②コダナ モングレー ナンボデモ アラー ナ。〈「ナンカ」より「グ  
レー」を言うことが多い〉

60'. こんなものでよければいくらでもあるよ。 ○コダナ モンデ ヨケリヤー ナ  
ンボデモ アル バイ。

全面否定《だって》《チュータチ》

61. 誰だってそんなことを言われたら怒るよ。 ○ダレチュータチ ソダナ コトー  
イワレリヤー ハラー タツル ヨ。

S. 次の動作が不可能《きり》《ナリ》

62. 10年前に家を出たきり、一度も帰って来ない。 ○ジューネンマエニ イヨー デ  
タナリ イッペンモ カエッチ コン。〈「～ナリ」は「まま」相当である。「き  
り」相当の「ギリ」などを提示してたしかめたが、「ナリ」だと言う。なお、「故  
郷」に相当する「クニ」「トコロ」なども提示したが「イエ」が答えられた〉

(5) モダリティー的なもの

T. 不確かなきもち《やら・か》《ヤラ・カ》

63. いつのまにやら眠ってしまった。 ○イツノマニカ ネチシモータ。

64. 何のことかわからない。 ○チンノコトヤラ ワキヤー ワカラン。

推定《か》《カ》

65. 後で遊びに行くかもしれない。 ○アトデ アズビニ イクカモ ワカラン バイ。  
どちらか分からない《やら》《ヤラ》

66. 来るのやら来ないのやらよく分からない。 ○ダルソヤラ コンソヤラ ワキヤー  
ワカラン。

はっきり言わない《やら》《カ》

67. どこやらへ引っ越して行かれたそうだ。 ○ドコザニカ ヒッコシテ イッチャツ  
タダナ。

U. 非難《たら・てば》《チュータラ・チャ》

68. お父さんたら今日も遅いねえ。 ○オ<sup>下</sup>サンチュ<sup>ー</sup>タラ キョ<sup>ー</sup>モ オセ<sup>ー</sup>チ<sup>ー</sup>。

69. お父さんてば、子供のようなことを言って。 ○オ<sup>下</sup>サンチャ コ<sup>下</sup>モノゲナ  
コト ユ<sup>ー</sup>デカラ。

#### V. 強調（ノナンノ・チュワ・チュワニヤ）

70. （野菜作りは）ひどく手間がかかって忙しい。 ○テ<sup>下</sup>ガイ<sup>ル</sup>ノナンノチ セ<sup>下</sup>ワ<sup>ジ</sup>ー。  
〈「ナンノ」は「ノナンノ」と、「ノ」に続けて言う〉

71. 米が（一晩に）一斗もは搗けないの。 ○コ<sup>下</sup>マ<sup>ガ</sup> イ<sup>下</sup>ツ<sup>ト</sup>チュ<sup>ワ</sup> ツ<sup>下</sup>ケン ソ。  
〈昭和40年代のメモより〉

72. 誰もがなし得ることではないよ。そんなことは。 ○ダ<sup>下</sup>レ<sup>下</sup>チュ<sup>ワ</sup>ニヤ シ<sup>下</sup>キ<sup>下</sup>ラン  
バイ。ソ<sup>下</sup>ゲ<sup>下</sup>ナ コ<sup>下</sup>ター。〈昭和40年代に聞いたもの〉

### Ⅲ. 総括（まとめ）

#### (1) 副助詞の多様さ

調査票に提示された共通語の副助詞は24語で、国語学辞典や文法の教科書に示された副助詞よりは多いが、この調査で得られた当該方言の副助詞はさらに多い。この実態によって、話しことばの表現では副助詞がよく働いていることに気づかされた。

#### (2) 副助詞の認定

提示された共通語の副助詞の中に「は」が見えないのは、話しことばでは前接部と熟合しがちなためであろうか。当該方言でも「コ<sup>下</sup>リヤ<sup>ー</sup>」（これは）、「ア<sup>下</sup>ラ」（あれは）などのように前接部と熟合するか、あるいは内在して形を見せない。ただし特に強調する時、あるいは区別する時には「ワ」が聞かれる。

当該方言の副助詞には「チュ<sup>下</sup>ータラ」（と言ったら）、「チュ<sup>下</sup>ータチ」（と言ったとて）のように「言う」の内在するものがある。71「チュ<sup>下</sup>ワ」、72「チュ<sup>下</sup>ワニヤ」にも「言う」の内在がうかがわれる。これらも一語の副助詞と考えた。

一方「ホ<sup>下</sup>ンジョ<sup>ー</sup>」（本ばかり）などの「ジ<sup>下</sup>ョ<sup>ー</sup>」、「ヤ<sup>下</sup>サイ<sup>下</sup>フ<sup>下</sup>チ<sup>下</sup>ンノ」（野菜なんか）の「チ<sup>下</sup>ンノ」は、常に「ノ」とともに用いられる。「ノ<sup>下</sup>ジ<sup>下</sup>ョ<sup>ー</sup>」「ノ<sup>下</sup>チ<sup>下</sup>ンノ」をそれぞれ一語の副助詞と認定したい。

#### (3) 副助詞使用状況の推移

「～しかない」相当の「ハ<sup>下</sup>ツ<sup>下</sup>チャ」について、この調査での話者たちは、以前に老人たちが言っていたのを記憶しているが、自分たちはあまり口にしないと答えた。筆者の昭和30年代、40年代のカードにはしばしば見られる副助詞である。また今回の話者たちの教示した「ナ<sup>下</sup>ツ<sup>下</sup>」 「ナ<sup>下</sup>」 （択一）、また等量の配分の「ズ<sup>下</sup>タ」 「ツ<sup>下</sup>ラ」、限定の「～ノ<sup>下</sup>ジ<sup>下</sup>ョ<sup>ー</sup>」「ノ<sup>下</sup>チ<sup>下</sup>ンノ」などは今日の青年層では聞けない。



副助詞に限定しても、そこに推移状況が見られる。

（おかの のぶこ 梅光女学院大学名誉教授）